

自治大卒業生の声

自治大学校卒業生（第1部課程第139期）

茨城県 片岡 継人

編集者注：本稿は、自治大学校における研修の特長などについて、自治大学校の卒業生が記したものです。

1 はじめに

私は、令和4年10月19日から令和5年2月15日までの約4か月間を自治大学校で過ごしました。

自治大学校への派遣について最初に声がかかったのは、研修に参加する半年ほど前でした。自治大学校のホームページを確認すると、自治大学校の研修は将来の幹部候補となる職員を養成するためのものであるとのこと。

入庁して10年程度の自分が参加するような研修ではないと思いましたが、自治大学校OBの先輩職員から、いい経験になるから絶対に参加した方がいいとのことのお言葉を頂き参加を決意しました。

2 基本法制研修

10月19日から11月18日までの約1か月間は憲法、行政法、民法、地方自治制度、地方公務員制度、財政学の講義を受講しました。

講師陣は、各分野の第一人者や実際に地方自治制度、地方公務員制度を構築してきた総務省職員の方であり、この研修でしか聞けないような制度改正の裏側など非常に興味深い話を聞くことができました。

講義自体は面白かったのですが、法制研修の総仕上げとしての効果測定は非常に厳しい壁でした。大学を卒業してからテストらしいテストを受ける機会がなかったので、徐々に神経をすり減らしながら夜な夜な勉強に取り組んだのも、今となっては良い思

い出です。

3 第1部課程研修

11月22日からは第1部課程の研修が始まりました。

基本法制研修に比べて、より演習に比重を置いた構成になっており、地域の行政課題を解決する施策を企画・立案する上で必要な能力を養うための、より実践的なカリキュラムであると感じました。

全員が上司でも部下でもない一研修生という立場なので、忌憚のない様々な意見を聞くことができると同時に、時には、研修生同士の意見が対立することもありました。

そうした場合でも、与えられた時間内に班としての意見をまとめる必要があるため、班員の意見をくみ取りながらも、時には強引に議論を進めていく必要があり、改めて複数名で一つの課題に取り組むことの難しさを感じました。

数ある演習の中でも最も印象に残っているのは政策立案演習です。

政策立案演習は、対象とする自治体の首長に提言することを想定して、政策を立案する演習で、70時間以上をかけて1つの政策を立案しました。

最初は余裕をもって作業を進めていたはずなのですが、徐々に議論が煮詰まり作業が進まなくなります。最初は和やかな雰囲気だった研修生も、〆切前になると全員が鬼気迫る表情で演習に取り組んでいました。

指導教官からは常に厳しい御指導をいただき、内容が二転三転しながらも、何とか与えられた時間内に成果物を完成させることができました。結果として政策立案演習の

最優秀賞に選んでいただくことができ、非常に思い出深い演習となりました。

4 自治大学校での生活について

研修生は、自治大学校に併設された寄宿舎に入寮して共同生活を送ります。

フロアの談話室では、研修生同士が各地の地酒や名産品を持ち寄り、研修での悩みや職場のこと、時にはプライベートなことまで語り合い親睦を深めました。

信じられない勢いで地元から応援物資が送られてくる研修生もあり、ありがたくご相伴にあずかりました。

また、フロアメンバーの誕生日には盛大な誕生会が開催されていたのも非常に思い出深いです。

休日には、毎週のように旅行を企画してくれるフロアメンバーがおり、自治大学校の外でも研修生同士の親睦を深めることができました。私は研修疲れであまり旅行に参加しなかったのですが、今となってはもっと旅行に参加しておけばよかったと少し後悔しています。

5 おわりに

4か月もの長期にわたって業務を離れ、同じ志を持った仲間と寝食を共にするというのは非常に貴重な体験であり、自分を自治体職員として大きく成長させてくれました。

私自身、自治大学校OB職員からの後押しがあっただけでこの研修に参加することを決意しましたが、同じように研修への参加を相談された際には、自信をもって研修に参加した方がいいと答えることができます。

今後は、自治大学校で得た知識や経験・ネットワークを日々の業務に活かすとともに、自治大学校で学んだ知識を茨城県の中で広く共有していきたいと思っています。

最後になりましたが、研修中にお世話に

なった講師の方々、自治大学校の職員の皆様、演習に協力いただいた関係自治体の皆様、また、研修を受講している4か月間、業務を引き継いでいただいた職場の上司や同僚に心より感謝申し上げます「自治大学校卒業生の声」とさせていただきます。